

市制施行 70 周年記念 アルフォンス・ミュシャ ふたつの世界

府中市美術館 24. 09. 21～12. 01

チェコ出身の「アルフォンス・ミュシャ」(1860～1939)は、パリを彩るポスターの数々を生んだデザイナーであることに加え、壮大なテーマを重厚な油彩で描き出した画家である「ふたつの顔を持つ芸術家である」と捉えられ、圧倒的な造形力があるために魅力満点である。

画伯の作品は、星、宝石、花(植物)などの様々な概念を女性の姿を用いて表現するスタイルと、華麗な曲線を多用したデザインが大きな特徴である。



アルフォン・ミュシャ 《四芸術「ダンス」》 1898年

リトグラフ/紙

画伯は、美術史で伝統的に用いられてきたアトリビュート(持物)ではなく、独自の造形言語による表現を試みている。本作品は、ヒマワリが咲き、木の葉が舞うなか、髪の毛と衣服をなびかせながら躍動している女性姿が描かれている。

アルフォン・ミュシャ 《四季》シリーズ 1896年 リトグラフ



作品は、春夏秋冬を1枚ずつパネルにして、各パネルには女性が一人ずつ描かれ、折々の季節のなかで思い思いの恰好で過ごしていて、それぞれの季節の花飾りを頭につけるなど、細部にもこだわったもので当時人気を博した。

夏の女性(左)は、池のほとりに腰かけ、水に足を浸して涼をとっており、**冬の女性**(右)は、ガウンで身をくるむようにして、凍えた小鳥に温かい息を吹きかけている。どの作品も女性と草木の組み合わせであるが、髪の毛の色を春はブロンド(金色)、夏はブルネット(褐色)というように描き分けて、それぞれの季節の花飾りを頭につけるなど、細部にもこだわっている作品である。